

# 第2回 津うのドまんなかバル 開催しました。

## ありがとうございました

三重県地方自治研究センター主任研究員 増田 芳則



発行所  
三重県地方自治研究センター  
三重県津市栄町2丁目361番地  
(一助)三重県地方自治労働文化センター内  
TEL059-227-3298  
FAX059-227-3116  
<http://www.mie-jichiken.jp/>  
info@mie-jichiken.jp



次はどこのお店に行こうか？作戦会議中！！

**お礼**  
第2回津うのドまんなかバルを、11月5日(木)6日(金)7日(土)に開催しました。関わっていただいた全ての方に、心から御礼申し上げます。おかげさまで、事故なく、そして大盛況のうちにて終えることができました。あり

さて、振り返りの前に、今回の津うのドまんなかバルの仕組みについて、再度説明します。今回のバルは「エントリーチケット方式」です。参加店は、バルメニューを500円・700円・1,000円のいずれかで金額設定しておきます。お客様は、【エントリーチケット1枚+現金(500円・700円・1,000円)】をお店に支払うと、バルメニューを楽しめる、という内容です。エントリーチケットは、いわゆる「入場券・参加証」という役割で、「お得なバルメニューを買うためのクーポン券」ともいえます。エントリーチケットは1冊6枚綴りで前売500円(当日600円)。バルメニューが500円で設定されていれば、エントリーチケット1枚+500円が必要であり、当日券で考えれば、お客様は600円を負担することになります。当然、バルメニューは、600円以上の価値のある(お得な)メニューとなります。これが今回の仕組みです。エントリー

### 今回の仕組み

がとうございました。ただ一方で、特に土曜の夜はお店が大変混雑し、完売するお店が何軒も発生したり、一部店舗での対応のまずさなど、ご迷惑をおかけしたこともあり、その点についてはお詫び申し上げます。反省し、今後の課題としてどのように解決・改善できるか、検討していきます。



ディープな路地に大行列！お客さん同士で情報交換も

エントリーチケットの販売金額が、そのまま今回の運営費に回り、現金部分がお店の売上になります。ちなみに前回は、金券チケット方式で、1冊5枚綴り前売3,000円(当日3,500円)で、チケット1枚をお店に渡すと、バルメニューを楽しめる、という内容でした。当日券で考えれば、お客様は700円を負担することになります。バルメニューは700円以上の価値のあるお得なメニューとなります。お店は、チケット1枚につき500円で実行委員会から清算を受けます(お店の売上になります)。チケット自体に「金券」としての価値を入れたのが前回で、支払いをお得にできる「クーポン券」としたのが今回です。

## チケットの販売状況

今回のチケットの販売冊数ですが、概算で1,800冊〜1,900冊です。前回が1,529冊でしたので、前回よりも冊数が増えています。さらに、前は5枚綴りです、今回は6枚綴りとしたため、11,000枚程度が流通した計算です。

チケットを購入して頂いた皆様、チケット販売にご協力頂いた皆様、本当にありがとうございます。

## 当日の様子

初の平日含めての開催ということ、どのような人出になるか、そもそもチケットも売れるのか？など、まるで想像もつかないチャレンジでした。

当日を迎えて、昨年の初開催の初日（土曜日）のような状態になることはないと思いつつ、それでも、いつもよりたくさんの方が大門を歩いている状態になれば嬉しいな、とは思っていました。が、それは甘い期待でしかなく、木曜の昼から夕方まで、私は「くらくらい顔」をしていたそうです。自分では暗い顔をしていたつもりはありませんでしたが、それはまあ「意気消沈」でした。いろいろなお店に声かけをしに行き、「やっぱり平日はあかん。まあ、これもやってみなわからんでな。」



大行列の先は満員のお店！さっそくりピーターができたそうです

「満席でクレームになるよりマシだよ。ちゃんとおもてなしできるもん。」といろいろ慰められたり、逆転のプラス思考を与えられたりしました。昨年の様子から、混乱しないように備えた仕込みをされていることを想像すると、どうしようもできないものの、意気消沈するばかりでした。

しかし、それは夕方まで。夕方5時を過ぎてから、ほつぽつとパンフレットを持って歩く人が出始め、あれよあれよと増えていきました。知っている面々も続々と本部に寄って「どう？人出は？」と声をかけてから、そのまま続々と夜の大門へ繰り出していくのでした。昼間の光景が嘘のように、「あそこのお店満席

です！」「あのお店の人に人だから！」「本当に今日は木曜日か!?!」という声が、ボランティアスタッフからも、お客様からも次から次へと本部へ届けられました。

結局初日の夜は、相当賑やかに、そして人気店においては満席にはなるものの、回転もよく、どこのお店でも楽しんで頂けたのではないのでしょうか？昨年のバルからしたら、明らかに人出は少ないものの、「そこそこ賑やかな遊園地」という感じでしょうか？それなりに、どこのアトラクションも人が並んでいて、賑やかなところに来ているな、という感覚は間違いなくありました。

そして、2日目の金曜日。朝から前日のチケット利用数の報告が、たくさんのお店から入ってきました。報告を聴くたびに、「平日の昼は厳しいな」と思い、さらに「今日もこうなるのでは・・・」と不安になりました。そして、昼が過ぎ、夕方になりました。「平日の昼の開催は厳しい」という分析は確固たるものとなり、さらに、夜への不安も高まりました。「金曜の夜なのに、木曜と同じ程度だったら、やはり今回のチケットの仕組みも、開催日の選択も失敗だったのかも知れない」と、思考は消極的になりました。

そして、夕方になり、5時半を過ぎても、6時を過ぎても前日のような出足はありません。今回も津市役所の同僚や、近所の友人らにボランティアスタッフとして本部に詰めてもらったのですが、「そんなにスタッ

フ要るか？もう飲んできていい？」と、「現地調査」を立候補する余裕がある程でした。またこの日も、知っている面々が本部に寄り、「今日もたくさんフェイスブックの更新をしてあげるからね！」と、心強い言葉をかけてから、夕闇の大門へ吸い込まれていきました。リアルタイム情報を、バルのフェイスブックページに投稿する「バルを楽しみつつ、情報発信をサポートする」という役目を、彼らも、ボランティアスタッフも受け持っていたのでした。

しかし、スロースタートぶりを心配するのも束の間、夜7時にはたくさんのお客様が大門を闊歩する光景が広がりました。明らかに前日よりもたくさんのお客様が！



若いお客さんもたくさん！盛り上がってます！！



夜のジャズ演奏には人だかりができました

ボランティアスタッフからは、「一気にお客さんが増えてお店が一杯に!」「この店はまだ空きがあるから、案内して!」など、連絡がたたくさん来るわ、フェイスブックでは、バル客として楽しんでる仲間達が、おいしそうな写真をたくさんアップしてくれるわで、忙しさというやましさと、盛り上がり嬉しさで、楽しい夜となりました。

夜が深まるにつれ、「ネタも酔飯もお店にあるもん全部つかってしまったわ!ごめん!もう出すもんない!」というお寿司屋さんからの連絡や、「あそこのお店、バルタイムを朝3時まで延長して対応してもらってるって!」というスタッフによるお店への交渉結果の連絡が続々と寄せられ、本部も忙しさを楽しめる賑

やかさでした。

さらに、2日目の夜は、津で初めての「ジャズフェス」イベントとなる「第1回津うのドまんなかジャズ」の初日でした。この日は路上演奏のみで、リハーサルは夕方5時から始まりました。「まちなかでジャズ」というものは、これまで体験したことはなかったのですが、これはなかなか面白く、リハーサルの段階からお客さんが集まり、拍手が起り、好感触を得たのか、演奏者もまるで本番かのように何曲も演奏したりと、緩く、かつ「距離が近い」ジャズイベントとしてスタートしました。

ジャズは、原曲を知らなくても楽しめるため、たくさんのお客さんが足を止め、ジャズ演奏に聴き入っていました。夜、飲み歩きながら、路上でジャズを楽しむ。こんなに楽しいことはありません。「バル」と「ジャズ」の相性の良さを実感しました。夜の大門に、遠くからでも聴こえるジャズの音色・・・飲み歩いている人も、食べ歩いている人も、ちよつと一息つけるような、2日目の夜となりました。

さあ、そして、いよいよ3日目、土曜日です。朝からジャズのメインステージの設営を見届けた後、チケットを預かってもらっているお店に、チケットの回収をしまわりました。実は前日の夜、本部にあるチケットの在庫が10数枚程度となっていたのです。残っているチケットを回収しなければ、間違いなく3日目



ジャズのメインステージでは、ビッグバンドも登場!!

の当日券が不足します。ぐるぐるとお店回りをし、本部を開設。ボランティアスタッフも配置について準備万端。ジャズのオープニングセレモニーに出席させてもらい、あとは成り行きに任せるのみでした。この平日の様子を見てきて、「何としても土曜日は昼から賑わいますように!」と思っていきましたが、嬉しいことに大賑わい。ジャズ同時開催の効果もあり、演奏を終えた中学生もチケットを握りしめ、ライブハウスにジャズを聴きに来たり、キッチンカーに並んだり、お寿司屋さんに入ってみたり・・・と、日常では味わえない体験をしていたようでした。天気にも恵まれ、親子連れもたくさんお越しいただきました。大門

の子育て広場「いここに広場」では、お父さんが子どもを遊ばせ、その間にお母さんたちが友だちと飲みに行くという、家族サーブス?のような光景も見られたそうです。

限定数での提供のお店も、12時には完売の連絡もあり、「明らかに昨年よりも賑わっている」という実感の中、昼の賑わいを楽しみ、そして、夕方となりました。

夕方からは、昼の賑わいが膨れ上がり、まさに「バルイベント」というほどの盛り上がりとなりました。その分、今まではなかったクレームも寄せられるなど、手放しで喜べない事態も発生しました。さらに、完売の連絡が、ほとんど本部に寄せられます。「これは、もしかして、まづいんじゃないか?」と、ボランティアスタッフと顔を見合わせ、少しでも席の空いている店舗がないか、手分けして情報を集めに走ってもらいました。得た情報は、すぐにフェイスブックに投稿するよう、怒号のような指示が飛び交いました。それでも、解消する見込みは立たず、「このままではお客さんが溢れてバルパニックが発生してしまう!」という危機的状況に。

そうこうしていると、午後8時半過ぎに、雨が降ってきました。このために、お客さんの滞留が少しだけ解消しましたが、まだまだ予断を許さない状況です。お店に顔の効くスタッフと手分けして、いくつのお店にバルタイムの延長を交渉に行き、少しでも余裕のあるお店には、

次々とお客さんを案内するなど、「バル難民」を解消するよう走り回りしました。おかげで、案内した人達からは、「こういう客引きの人、東京にいるよね。本当に君、公務員なの? (笑)」と、お褒め?の言葉も頂戴しました。

そして、午後11時を過ぎたところで、ようやくバルパニックが起きない確証を得て、スタッフ一同、ほっと一息をつきました。そのまま、事故なく本部の片づけまでこぎつけ、3日間のドまんなかバルはお開きとなりました。

最終日の夜、バルパニックの発生が起きずに済んだことについては、私なりの見解があります。それは、今年が昨年の金券チケット方式では



中学生もジャズに参加! 実力者揃いの素晴らしいステージ!!

なく、安価なクーポンのチケットであったことです。そのため「今日中になんとしても使い切らない」という傾向が弱く、雨が降ったことが一区切りとなり、客足が引きやすかったのだろう、と私は観ていました。もし、チケットが昨年方式であったら、あのままバルパニックとなり、各方面にご迷惑をおかけしたのではないだろうか・・・と、今思返しても、ぞつとします。

## 2回 バルにおける 労働組合の役割

今回もたくさんさんの課題が明らかになりました。それらについては、また別稿で言及したいと思います。さて、自治労三重県本部と関わりのある三重県地方自治研究センターとしては、労働組合がバルに関わる意味を見出すことは、今後の展開について非常に重要な意味を持ちます。こうした地域活性化事業について、労働組合はどのような関わり方をすればよいのでしょうか。組合運動の一部として、どういう視点で捉えたらよいのでしょうか。

今回を通じて確信したのは、「場」づくりです。同じ所属の組合員同士および他組合組織と交流する「場」づくりです。クロースドな大会や懇親会ではなく、オープンな「バル」という空間で、つながる機会、つながることができる「場」をつくる。そうした組合運動として捉えれば、幅広い組合員同士のコミュニケーションを深める機会になり、また、

他所属の組合員との交流が、そのまま異業種交流会に発展します。若手組合員向けの「オープンな」交流行事としてもよいでしょう。重要なのは、同じ属性(労働組合員)の人が、同じ場に集う体験を共有することで、コミュニケーションのハードルが下がります。同じ体験を共有できる「場」づくりとも言え換えることができますね。

「場」づくりの視点で捉えると、地域活性化取組に対する労働組合の役割は、「支援」ではなく、「相乗り」です。組合運動の一部として、「場」づくりの機会として、バルに「相乗り」するのです。「場」づくり



最終日は満員御礼! ありがとうございます!!

も、交流や体験の共有というだけでなく、例えば、給食展など、公務労働現場の発表の「場」としても広がりをつくれるでしょう。バルに合わせ、大会やシンポジウムを開催することも、面白い展開になるかも知れません。「相乗り」により、組合員にも、地域に対しても、「労働組合は心強い味方」として、存在感のアピールや、イメージアップにもつながります。

バルの運営側も、「同じ属性」の来場者が多い方が、安全で安定的な運営が期待できます。「同じ属性」であれば、参加者同士や、お店に対して荒れた振る舞いをするようなこともないでしょうし、また、「同じ属性」であるがゆえに、口コミ効果も生まれやすく、リピーター創出も期待できます。

このように、労働組合が「相乗り」することで、文字通り、地域活性化における「相乗効果」を生み出すことができます。バルという新しいまちづくりの仕組みに、プレイヤーとして労働組合が入ることで、大きな効果を生み出せるのではないのでしょうか? 労働組合が「相乗り」するバル。それができたら全国初の取組に! リーディングケースになります。実現できたら、すごいことですね。

ワクワクは続きます! 津うのドまんなかバル!

主任研究員 増田芳則